

# アメリカ的想像力における千年王国論的終末論とタイポロジー<sup>1)</sup>

丹治 陽子

## Millennial Eschatology and Typology in the American Imagination

Yōko TANJI

### (終末論と千年王国論)

歴史の時間を千年という長いスパンで考えると、2001年は第二の千年紀 (millennium) が終わり、さらに大きな第三の千年紀が始まろうという大きな歴史の節目だといえる。世紀の変わり目には、新しい時代を目にすることができることに幸福を感じて期待に胸をふくらませる人もいれば、未知の世界に踏み出す不安をもつ人もいる。「世紀末」という言葉がもたらす不安感はそのから来るのであり、まして、千年期の変わり目ともなれば不安はいよいよ高まり、第二千年紀の終わりに世界が崩壊しこの世の終わりが来るということを暗示するようなノストラダムスの予言は、その不安をいよいよ煽るものとなる。

ところでこの「この世の終わり」という考え方は、歴史を直線的なものと見なすところから出てくるものである。私たちが歴史年表を考えると、紀元前から紀元後にのびる一本の直線を想定し、そこに年代順に事件を並べて行くわけだが、これは近代の人間の時間認識である。

ミルチャ・エリアーデは『永遠回帰の神話』のなかで、古代的人間と、ユダヤ・キリスト教的影響を強く受けた近代の人間との間の対比を試みている。エリアーデによれば、古代人は「宇宙的リズムと調和して生きていた」(Eliade [1971] 95) のであり、彼らにとって「季節的な時間の再生は……新しい天地創造、天地開闢のわざの反復」(Eliade [1971] 52) であった。つまり古代には、時間は自然(春夏秋冬)の進行と同様、円環的に進行すると考えられ、歴史は宇宙の年が終わればその始めにもどり、出来事を永遠に繰り返していく、という円環のパターンでとらえられていた。つまり古代人は宇宙(コスモス)のなかに生きていたのである。これに対して近代の人間は、時間を、過去から未来へ向かって不可逆的に流れるものとしてとらえ、自分たちはその歴史の時間の流れのなかで生きていると考える。

エリアーデの説では、円環的な時間認識が直線的な時間認識に変わったのは、ヘブライ人の預言者たちが、個々の歴史的事件は「同じ一神の意志の具体的表現」であり、それらには隠された連鎖があるのだと証明し、歴史を神の示現として見るようになったときであった(Eliade [1971] 102-04)。たとえばそれは、「この世界の創造者である神は、彼が選んだ民の歴史を直線的な歴史の発展に沿って特別な目標に向かって導く。神は約束の地を備え、彼らを捕囚という破局を通じて新たな救済の時期へと導く。神は民に対して、ダビデの家系から強力な平和の君が出ることを約束する」などといったもので、神が直線的な歴史を支配するという構図になってはいるが、しかし「歴史の終わり」という終末論的概念はこの段階ではまだ見られない。

いっぽうイスラム世界では、円環的な時間認識は早々に捨てられ、歴史は直線的なものと考えられるようになった。彼らの考えによれば、「この世の出来事の内容は、人間を獲得しようとして戦う善なる神と悪しき霊の間の抗争である。この世の終わりには、死者は起こされて裁きかけられ、悪しき霊は善なる神の軍勢によって討ち滅ぼされ、そしてあらゆる悪から解放された永遠に幸いなる存在様式がこの地上に始まる。この至福なる期間が終局、すなわち歴史の終末の先触れとなる」という。ここでもひとつの時代が終わり新しい時代が始まるということが述べられているが、その終わりと始まりは自然のサイクルに沿って円環的に繰り返されるのではなく、善と悪の戦いに最終的な決着がつくことによってもたらされる一回的な出来事となっている。そして時の終わりについてのこのイスラム的信仰が、のちに旧約聖書の信仰と出会い、ユダヤ思想に導入されていくことになるのである（シュミットハルス 503-504）。

そしてもともと「歴史の終わり」という概念をもっていなかった旧約聖書の歴史観は、このイスラム的終末論の影響下に終末論的色彩を帯びはじめたのである。つまり、最終戦争での悪魔の完全な敗北によってそれまで悪魔が支配していた古い世界があとかたもなく崩壊し、そのあとに絶対的な救済の新しい世界、神の国（「新しい天、新しい地」[「ヨハネ黙示録」21章1節]）が始まるという黙示文学的終末論が生じてきたのである。

そしてここから千年王国論（millennialism）が生まれる。千年王国論というのは、聖書の「ヨハネ黙示録」20章1-7節を出典とする神学説で、全人類の最後の審判以前にキリストがよみがえった聖人たちとともに地上にもどり、この地上で千年にわたって栄光ある王国を統治するという信仰である。さらに「ヨハネ黙示録」によれば、「ひとりの天使が天から降りてきて、千年の間サタン（＝アンチキリスト）である『龍』を閉じこめる。この千年がたったあと、サタンは解放される。サタンは地上の諸国民を最後の反抗のために『最終決戦場（ハルマゲドン）』に結集させるが、うち破られ、『火の池』に投げこまれる。ついで大いなる審判が行われ、それにつづいて永遠の天上の国が確立される」という。

キリストが統治する千年王国というこの地上のユートピアは、サタン＝アンチキリストを暴力的な闘争において打倒することによってのみ達成されるという点で、革命的な性格を帯びている。実際、17世紀なかばのイギリスにおいて爆発的流行の時代を迎えた千年王国論は、ピューリタン革命を推進する力ともなっていく。と同時に、この千年王国の思想はピルグリム・ファーザーズと呼ばれるピューリタンたちによって新世界アメリカにも移植される。彼らはアメリカを「ヨハネ黙示録」にある「新しい天、新しい地」として意識するようになるのである。

それは、アメリカという大陸がもともと「発見」されたときから、千年王国論的終末論の影のなかにあったからである。その大陸はコロンブスにとって、まさに黙示録的な「新しい天、新しい地」にはかならなかった。アメリカ大陸発見後、ある手紙で彼はつぎのように書いている、「神は私めを、神がイザヤの口を借りて語った後に、聖ヨハネの黙示録のなかで語っておられる新しい天上、新しい大陸の使徒となされたのであります。したがって神は私にその在りかをお教えくださったのです」（エリアーデ[1992] 159-160）。

もちろん、大航海時代の他の航海者同様、コロンブスの動機が、黄金や香料といった東洋の富を手に入れたいという現実的な欲求にあったことは否めない事実である。彼の原住民搾取については、すでに多くのことが書かれている。しかしそれと同様に忘れてはならないのは、それほど遠くない将来における世界の終末を信じていたコロンブスにとって、新大陸の発見は、異教徒の回心、反キ

リスト者の破滅を経て世界の終末にいたる壮大なドラマの序章にほかならなかったということである。アメリカという新大陸は、そのときすでに、ヨーロッパの人びとの前に千年王国論的な意味あいをもって立ち現れていたのである。

### （ピルグリム・ファーザーズと建国神話）

1620年9月、のちにピルグリム・ファーザーズ（巡礼父祖）と呼ばれるピューリタンたちは、イギリスのプリマス港を出航、2か月の航海を経て、11月、ニューイングランドのケイプコッド沖にたどり着いた。そして、彼らはプリマスに入植する。

ピューリタンというのはどのような存在か。彼らはどのような経過で現れ、そのなかからなぜアメリカを目指して旅立つ人びとが出てきたのか<sup>2)</sup>。この問いに答えるためには、いったん歴史を遡って、イギリス国教会の成立とその発展を簡単にふりかえらなくてはならない。

イギリス国教会が成立したのは、1534年、イギリス国王ヘンリー八世が自分の離婚問題を機に、ローマ・カトリック教会から離れる目的で「国王至上法」を公布したときだった。つぎの国王エドワード六世は国教会のプロテスタント化を進めたが、しかし1553年に即位したメアリー一世がスペイン王子と結婚し、カトリックがふたたびイギリスにもちこまれたため、約800名のプロテスタントが大陸に亡命することを余儀なくされた。そのうちの多くは、エリザベス一世が即位し、彼女がイギリス国教会を再確立するとともに帰国した。彼らは国教会からカトリック的要素を一掃する（purify）ことを求めたので、ピューリタン（puritan）と呼ばれるようになったが、そのなかの一部が自分たちの敵をアンチキリストと見なす千年王国論的傾向をもっていたのである。

したがってこの時点で千年王国論者がアンチキリストと名指したのは、ローマ・カトリックであった（オスマン・トルコ帝国でもあったが）。ところが、エリザベス一世の死後、国王ジェームズ一世がカトリック寄りの態度をとり、その息子のチャールズ一世もフランスからカトリックの王妃を迎え、親カトリック的政策をとるにおよんで、カトリックの復活をもくろんでいるのではないかと疑念をもたれた国王が、カンタベリー大司教ウィリアム・ロードなどとともに、アンチキリストと見なされるようになってくる。そしてそれらの国内の敵をアンチキリストと見なしたピューリタンの一部は、迫害を避けてついにアメリカへの亡命・移住を決行したが、こうして千年王国論は彼らとともに新世界アメリカに移植されることになったのである。

ピルグリム・ファーザーズは、このような状況下において迫害を逃れ、自分たちの信仰を守るためにイギリスを離れたピューリタンの一部であった。彼らがまず向かったのは当時宗教的に寛容だったオランダで、それは1608年のことだった。しかしここでの12年にわたる暮らしは、「オランダでの自由よりも、イギリスの牢獄のほうがむしろよしとしたぐらいであった」（Bradford 95）という記述が残っているほど、厳しく苦しいものだった。生活の苦しみのほかにも、自由な雰囲気の中かで子供たちをピューリタンとして教育することの難しさなどが重なって、彼らはふたたび移住を考え、「世界の遠い土地に、キリストの王国の福音を述べ広める」という偉大な事業を遂行するために、「アメリカのあの広大で無人の土地のどこか」へ行く決意をしたのだった。

この過程で彼らの行動を支えたのは旧約聖書「創世記」のアブラハムの物語であった。「創世記」12章1-4節には、つぎのような一節がある。

Now the LORD had said unto Abram, Get thee out of thy country, and from thy

kindred, and from thy father's house, unto a land that I will show thee: . . . So Abram departed

(ときに主はアブラムに言われた。「あなたは国を出て、親族に分かれ、父の家を離れ、私が示す地に行きなさい」[中略] アブラムは主が言われたようにいで立った。)

この挿話は新約聖書の「ヘブル人への手紙」11章8節にはつぎのように書かれている。

By faith Abraham, when he was called to go out into a place which he should after receive for an inheritance, obeyed; and he went out, not knowing whither he went.

(信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出て行けとのお召しを受けたとき、それに従い、行く先も知らぬまま旅立った。)

これらは当時のピューリタンが好んで読んだ一節であるが、彼らは新大陸に旅立つ自分たちを、主のお召しに従って「行く先も知らぬまま旅立った」信仰の篤いアブラハムの姿に重ね合わせたのである。彼らの想像力のなかで、彼らは、もどるべき家をもたず、神の国をこの地上に建設するために神の命ずるままに旅をしたアブラハムだった。このようにピューリタンたちは、自分たちの姿を聖書の人物たちと重ねあわせ、自分たちの行動を聖書の出来事と重ねあわせて考えるタイポロジー的傾向をもつ人びとだった(タイポロジーについてはのちに詳述する)。

こうして彼らはイギリスを経由し大西洋を2か月航海したあと、1620年11月に、当初の目的地であったヴァージニアをはるか北にはずれたプリマスにたどり着く。新大陸への上陸に先立って、彼らは自分たちがこれから築くピューリタン社会の理念を文章にし、誓約を交わす。これが「メイフラワー誓約」と呼ばれるものである。プリマス植民地建設の中心的指導者であったウィリアム・ブラッドフォード(1590-1657)の『プリマス植民地について』より、当時の英語表記のままの「メイフラワー誓約」を以下に引用する。

In the name of God, Amen. We whose names are under-written, the loyall subjects of our dread sovereigne Lord, King James, by the grace of God, of Great Britaine, Franc, and Ireland king, defender of the faith, etc., haveing undertaken, for the glorie of God, and advancemente of the Christian faith, and honour of our king and countrie, a voyage to plant the first colonie in the Northerne parts of Virginia, doe by these presents solemnly and mutually in the presence of God, and one of another, covenant and combine our selves together into a civill body politick, for our better ordering and preservation and furtherance of the ends aforesaid; and by vertue hearof to enacte, constitute, and frame such just and equall lawes, ordinances, acts, constitutions, and offices, from time to time, as shall be thought most meete and convenient for the generall good of the Colonie, unto which we promise all due submission and obedience. In witnes wherof we have hereunder subscribed our names at Cap-Codd the 11. of November, in the year of the raigne of our sovereigne lord, King James, of England, France, and Ireland the eighteenth, and of Scotland the fiftie fourth. An<sup>o</sup> : Dom. 1620. (Bradford 102)

ここにはキリストの王国を建設するという千年王国論的目的が示されている同時に、自由な個人が契約によって政治団体を創設し、その政治上の権力の根拠は個人の同意にあるという近代的な社会契約の理念が示されている。近代社会はこの文章とともに出現したのであるが、いまはそれについては述べない。

ところでブラッドフォードは、12年にわたる長い苦難の航海を終えて新大陸にたどりついたピルグリム・ファーザーズのように、つぎのように記述する。

Being thus arived in a good harbor and brought safe to land, they fell upon their knees and blessed the God of heaven, who had brought them over the vast and furious ocean and delivered them from all the periles and miseries therof, againe to set their feete on the firme and stable earth, their proper elemente. (Bradford 100)

彼らは上陸して、まず神に感謝の祈りを捧げる。しかし彼らの眼前に広がるのは、厳しい冬が始まろうとしている11月の大地だった。それは「野獣と蛮人がいっぱいいる恐ろしい、広漠たる荒野」であり、あらゆるものは「風雨にさらされ」、「未開の様相」を呈している。ブラッドフォードはこのときの「この哀れな人びとの、そのときの状況」を思うと、「しばらく筆をおき、なかば呆然とせざるを得ない」とつぶけている。

But hear I cannot but stay and make a pause, and stand half amased at this poore peoples presente condition; and so I thinke will the reader too, when he well considers the same. Being thus passed the vast ocean, and a sea of troubles before in their preparation (as may be remembred by that which wente before), they had now no friends to wellcome them, nor inns to entertaine or refresh their weatherbeaten bodys, no houses or much less townes to repaire too, to seeke for succoure. — And for the season it was winter, and they that know the winters of that cuntrie know them to be sharp and violent, and subjecte to cruell and feirce stormes, deangerous to travill to known places, much more to serch an unknown coast. Besides, what could they see but a hidious and desolate wildernes, full of wild beasts and willd men? and what multitudes ther might be of them they knew not. Nether could they, as it were, goe up to the tope of Pisgah, to vew from this willdernes a more goodly cuntrie to feed their hops; for which way soever they turnd their eys (save upward to the heavens) they could have litle solace or content in respecte of any outward objects. For summer being done, all things stand upon them with a wetherbeaten face; and the whole countrie, full of woods and thickets, represented a wild and savage heiw. If they looked behind them, ther was the mighty ocean which they had passed, and was now as a maine barr and goulfe to seperate them from all the civill parts of the world. (Bradford 100-101)

眼前には荒野が、背後には「深淵」なる大洋が、どちらも彼らを拒絶するかのように横たわっている。そしてじゅうぶん覚悟の上とはいえ、いかにも過酷な生活が彼らを待ちうけている。実際、

このときメイフラワー号でやってきた移民は102名（そのうちの40名がピューリタン）であったが、この年の冬を生き延びて翌年の春を迎えることができたのは約半分にすぎなかった。そのような状況のなかで「彼らを支えることができたのは神の霊と神の恩恵以外に何があったろう」、そうブラッドフォードはつづけ、旧約聖書「申命記」や「詩編」の言葉を引用して神をほめたたえているのである。

ここで注目しなければならないのは、「荒野 (wilddernes)」と「自分たちが渡ってきた巨大な大洋 (the mighty ocean which they had passed)」という言葉である。これらは直接には目の前に広がる未開の森や彼らが横断してきたばかりの大西洋を指しているが、それと同時に、ピューリタンの心のなかでは、試練の場所として聖書にたびたび現れる「荒野」でもあり、モーゼに率いられてイスラエルの民が渡った「紅海」でもあった。

たとえば聖書には、イエスが40日間荒野に滞在し、悪魔の誘惑と戦うという挿話がある。そこでは荒野は悪の住処を表象している。そしてキリストが荒野に滞在したことの意義は、彼が神の反逆者である悪魔と戦い、神の真実を実証するための試練を経験するということにある。信仰のうすい者がこのような新大陸の荒野を目にしたならば、何という地の果てに来てしまったのだろうという絶望感に打ちひしがれるであろうが、しかしピューリタンたちは荒野のキリストと自分たちとを重ねあわせ、自分たちは神の真実を実証するためにここにいるというキリスト教徒としての使命を感じるにより、闘志を燃やしたのであった。というより、絶望的な状況のなかで生きる力を失わないために、荒野のキリストと自分たちとを重ねあわせたとやったほうがいいかもしれない。

同じように、自分たちが大西洋を渡ってきたことについても、彼らはそれを聖書の出来事と重ねあわせている。すなわち自分たちを、モーゼに率いられてエジプトでの奴隷状態を脱出し（「出エジプト」）、紅海を渡り、神が約束されたカナンの地にいたり、そこに王国を築くイスラエルの民に重ねあわせているのである。そうすることにより彼らは、自分たちの未来にもやはり王国が約束されているのだという希望を強調したのであった（「彼らを支えることができたのは神の霊と神の恩恵以外に何があったろう」）。ここにも、聖書の世界と自分たちの世界とを重ねあわせて見る、タイポロジーと呼ばれるピューリタンに特徴的な思考法が見られるだろう。

さて、このようにして始まったプリマス植民地の人口は、40年後には約2000人に達する。その後、1691年にはマサチューセッツ植民地に併合されてしまうものの、ピルグリム・ファーザーズの植民の歴史は、アメリカ建国の神話として、そのタイポロジー的な思考法とともに、アメリカ人の想像力のなかに残りつづけるのである。

### （マサチューセッツ植民地）

ピルグリム・ファーザーズがプリマス植民地を開いた9年後の1629年、国王から特許状を得て発足したマサチューセッツ湾会社は、マサチューセッツに大規模な植民地の建設を始める。こうして1629年には300名がセーラムへ、1630年には約1000名の人びとがボストンに入植し、これにつづいて「大移住 (Great Migration)」と呼ばれる移民の波がニューイングランドに押し寄せることになる。その数は1630年代の10年間で約21000人に達したと言われている。

ピルグリム・ファーザーズが、牧師や村の名士に率いられた、英国中北部ノッティンガムシャーの小さな農村スクルービとその近隣に住む人びとであったのに対し、マサチューセッツ植民地を形成した人びとの中心にいたのは、反体制派の優秀で野心的な牧師たちだった。彼らもまた信仰の篤

い人びとであったが、地位と才能に恵まれていた彼らは、はじめは信仰生活を守ることだけを目的として国を捨てるという行動には出ずに、なんとしてもイギリス国内にとどまり、宗教改革を実現させようと考えていた。弾圧の強化にともなっていよいよ移住せざるを得なくなったとき、これは退却でも亡命でもなく前進なのだという自分を自分たちに納得させるためにも、「改革の模範を荒野で実現するという使命を自覚し、その実現の見通しをたてて移住を決意した」のである。「新しい土地で真の教会改革を実践するなら、将来イギリスに改革の機会が到来したとき、自分たちの改革がかならず模範になる」と考えたのである。彼らの使命感はこのようにひじょうに強いものであった。

彼らと信徒たちの間の親密な連帯が起こした運動は、やがてニューイングランドにもたらされたピューリタニズムの本質になり、現在のアメリカ人の精神にまで及ぶ大きな影響源となっていく。マサチューセッツ湾会社は、植民地議会のような性格をもつ総会議をもっていたため、1684年に特許状が取り消されるまで、イギリス本国の干渉をあまり受けずに事実上の自治権をもって植民地開拓を行っていた。そういう意味でマサチューセッツ植民地はアメリカに特徴的な思考様式が自由に育つことのできる土壌だったのである。

マサチューセッツ植民地の初代総督は、イギリス東部サフォークのジェントリーの家に生まれ、ケンブリッジ大学在学中にピューリタニズムと出会ったジョン・ウィンスロップ (1588-1649) だった。1630年、アメリカに向かって大西洋を航海するアーベラ号の船上で、彼は「キリスト教徒の慈愛のひな形」という演説をしているが、そこで彼は、神と自分たちの間には目的が存在し、この事業のために自分たちは神との契約に入り、目的達成のために植民地を築こうとしているのだと語っている。この演説には、アメリカ建設の宗教的イメージがよく表れているので、一部を引用したい。

for this end, wee must be knitt together in this worke as one man, wee must entertaine each other in brotherly Affeccion, . . . allwayes haueing before our eyes our Commission and Community in the worke, our Community as members of the same body, soe shall wee keepe the vnitie of the spirit in the bond of peace, the Lord will be our God and delight to dwell among vs, as his owne people and will commaund a blessing vpon vs in all our wayes, . . . wee must Consider that wee shall be as a Citty vpon a Hill, the eies of all people are vpon vs; soe that if wee shall deale falselu with our god in this worke wee haue vndertaken and soe cause him to withdrawe his present help from vs, wee shall be made a story and by-word through the world, wee shall open the mouthes of enemies to speake euill of the wayes of god and all professours for Gods sake; wee shall shame the faces of many of gods worthy seruants, and cause theire prayers to be turned into Cursses vpon vs till wee be consumed out of the good land whether wee are goeing . . . (Winthrop, "A Modell of Christian Charity" 198-99)

「丘の上の町 (a Citty vpon a Hill)」というのはキリスト教の聖都エルサレムを指し示す言葉である (たとえば「マタイ伝」5章14節)。ウィンスロップは、自分たちの移住の目的は、大陸に世界の範となる立派な「丘の上の町」すなわち新しいエルサレムをうちたてることであり、この大目的は共同体の構成員が心をひとつにして、神との間に結ばれた契約を果たすことによってのみ達

成されるのだと言っている。そして、世界中の目が注がれているこの事業に失敗すれば、自分たちが嘲笑されるばかりでなく、神の敵に対して、神を非難する口実を与えることになる警告している。当時の状況を考えれば、この植民地に世界中の目が向けられているというのは過剰な自意識だと言えるが、しかしそれほど強い信念を人びとに喚起することによって植民地建設の理念が守られてきたのだということに注目したい。

しかしここで確認しておきたいのは、ニューイングランドの中心となっていくマサチューセッツ植民地においても、ピューリタンたちが自分たちの建設する植民地を、「丘の上の町」という聖書の記述と重ねあわせているということである。このようなタイポロジー的傾向は、アメリカに千年王国論的な「新しい地」を求めてやってきたピューリタンたちに共通する特徴として、プリマス植民地にも、マサチューセッツ植民地にも、ともに認められる傾向なのであった。

### （ピューリタンのタイポロジー的思考方法）

ここでいよいよタイポロジー＝予型論について説明を加えておきたい。そのためには、まず聖書がどのように構成されているかを見なければならない。<sup>3)</sup>

聖書は旧約聖書39巻と、新約聖書27巻からなりたっているが、その第一の特徴は、それが歴史書であるということに求められる。すなわち旧約聖書は、「創世記」における世界と人類の創造に始まり、キリスト誕生以前の古代イスラエル民族の起源と発展を時代に沿って記録しており、他方、新約聖書は、イエス・キリストの誕生からキリスト教会の成立と発展を時代順に示し、そして最後に「ヨハネ黙示録」における世界の終末を予言しているのである。

しかし聖書がたんに単線的に歴史を記述しているだけかといえば、かならずしもそうは言えない。新約と旧約とは書かれた時代も、作者も、記述に使われた言語も違う独立した二冊の書物ではある。しかし、このふたつの聖書は合わせ鏡のような構造になっており、旧約に起こる出来事はすべて、新約で起こる出来事の「予型 (type)」すなわち前兆となっており、逆にいえば、新約の出来事はすべて、旧約の「予型」の実現、すなわち「対型 (antitype)」となっているのである。このような聖書解釈がタイポロジーと呼ばれているものにほかならない。

これは旧約と新約という一見それぞれに独立していると見えるふたつの聖書のなかに、実際には神の啓示が一貫して現れているということを主張するものである。この考え方によれば、旧約聖書「ヨナ書」のヨナは、新約聖書のキリストの予型であり、ヨナ（予型）が鯨の腹のなかで三日三晩過ごしたという出来事は、キリスト（対型）が死んで三日後に墓からよみがえったことの予型になっているのである。

一般に宗教改革者はタイポロジーに慎重だったと言われているが、しかしニューイングランドに移住したピューリタンたちは、積極的にタイポロジー的思考を取り入れた。しかも彼らはたんに旧約と新約との間に予型と対型の関係を発見していくだけでなく、旧約であれ新約であれ、聖書に書かれている記述と自分たちの現在の行為との間に予型と対型の関係を認めようとしていたのである。すでに述べたように、彼らは、イギリスでの迫害を逃れて大西洋を渡り、新大陸の荒野での試練に耐えて神の王国を築こうとする自分たちの一大事業を、古代イスラエルの民がエジプトでの奴隷生活を逃れ、モーゼに率いられて紅海を渡り、モーゼの死後、荒野での試練を経て約束の地カナンに至ったという旧約に描かれた歴史と重ねている。彼らはニューイングランドへの移住を旧約の「出エジプト記」と重ね合わせることで、自分たちの運命のなかに神の恩恵と摂理を読みとり、自



分たちの歴史を、イギリス本国に対しても植民地内の人びとに対しても正当化し意味づけようとしたのである。

このように現実の世界で起こっていることの背後に、予型としての聖書の世界を認め、そのことによって自分たちの存在に大きな意味を見出そうとする傾向は、ピューリタンの間ではさまざまな日常的なレベルに見られることであった。それは「この世の中にあるものはすべて神の摂理の現れである」というカルヴィニズムの世界観に由来するとも言えるが、とにかくピューリタンたちは身の回りに起こったことを注意深く眺め、せっせと日々の記録を書き、そのなかのごく些細なことも神の摂理に結びつけて解釈し、自分たちの植民地建設が神に祝福されたものだという証拠を示そうとしている。

ジョン・ウインスロップの『日誌』からそのような例をひとつ拾ってみよう。1648年8月15日、ケンブリッジでは宗教会議が開かれていた。すばらしい説教が行われている最中に会場に一匹の蛇が侵入したが、ひとりの長老が蛇の頭を踏みつけ、鉈の付いた杖で押さえつけて殺した。ウインスロップはこの事件のあらましを簡単に述べた後、この事件の意味をつぎのように解釈している。

This being so remarkable, and nothing falling out but by divine providence, it is out of doubt, the Lord discovered somewhat of his mind in it. The serpent is the devil; the synod, the representative of the churches of Christ in New England. The devil had formerly and lately attempted their disturbance and dissolution; but their faith in the seed of the woman overcame him and crushed his head. (John Winthrop "Journal" 142-43)

ニューイングランドのキリスト教会の代表である宗教会議にたまたま「蛇」がまぎれこんできて殺された、という日常的な事実のなかに神の摂理を認めようとするこの解釈は、現実の「蛇」の背後に、聖書のなかで「蛇」が表象しているもの＝「悪魔」を見ることによってはじめて成り立つ解釈であり、現代の私たちから見れば、信仰というめがねを通して現実を眺め、その背後に神の摂理を読みこんだ拡大解釈にすぎない。しかし当時のピューリタンの歴史書、説教集、日誌にはこのような記述があふれており、そのことは、いかに彼らが現実の世界と聖書の世界を二重写しにながめていたか、いかに彼らがタイポロジー的思考法に支配されていたかを示している。

ちなみに、日常的現実の背後に聖書の世界を見てとる二重写しの世界観と呼ぶべきものは、一種の象徴主義的世界観として、アメリカ文学のなかに受け継がれていく。その顕著な例は、ピューリタニズムの影響の色濃いニューイングランドに花開いたアメリカン・ルネッサンス期の作家たち、なかでもハーマン・メルヴィルやナサニエル・ホーソンの作品であろう。たとえばメルヴィルの『白鯨』という小説にはエイハブ船長が語るつぎのような言葉がある。

Hark, ye yet again, — the little lower layer. All visible objects, man, are but as pasteboard masks. But in each event — in the living act, the undoubted deed — there, some unknown but still reasoning thing puts forth the mouldings of its features from behind the unreasoning mask. (Melville 144)

「眼に見えるものはすべてボール紙の仮面」だが、「その滅茶な仮面」の背後には「何じゃか智慧では分らんが、ちゃんと筋道通った滅茶でないもの」が存在している——このような二重写しの現実観は、背後にある「ちゃんと筋道通った滅茶でないもの」というのがかならずしも聖書の世界と特定されていない以上、ピューリタンたちのタイポロジー的現実認識そのものとは言えないかもしれないが、しかし両者の現実観の構造は基本的に同一のものと言ってさしつかえないだろう。

#### （原初への回帰）

終末論的千年王国論とは、善と悪の戦いの場であるこの世で、両者の間に最終戦争が起こり、悪の完全な敗北によって世界は徹底的に破壊し尽くされ、そのカオスの後に新しい神の王国（「新しい天、新しい地」）が出現するというものである。つまり歴史のひとつのサイクルが終わって新しい世界が始まるということである。これは、春夏秋冬という自然のサイクルにそって何度も始めと終わりを繰り返す古代人の世界像とは違う。しかし人類は直線的な歴史のなかに生きるようになって、なお終わりを始まりへと結びつける円環的歴史観から完全に自由になってはいないのだ。

ミルチャ・エリアーデは「永遠回帰の神話」についてつぎのように書いている。

Any form whatever, by the mere fact that it exists as such and endures, necessarily loses vigor and becomes worn; to recover vigor, it must be reabsorbed into the formless if only for an instant; it must be restored to the primordial unity from which it issued; in other words, it must return to "chaos" (on the cosmic plane), to "orgy" (on the social plane), to "darkness" (for seed), to "water" (baptism on the human plane, Atlantis on the plane of history, and so on). (Eliade [1971] 88)

形あるものはいかなるものも、それが存在しつづけるというそれだけのことで、必然的に活力を失い疲弊していくが、その活力を回復するためには、いったん始源の統一——「(宇宙的次元での)カオス、(社会的次元での)オルギア、(種子にとっての)闇、水(人間的次元での洗礼、歴史的次元でのアトランティス等々)」——へともどされなければならない。そしてアメリカ人にとって、その「始源の統一」は、ピューリタンたちが渡ってきた大西洋の「水」なのであった。

ちょうどキリスト教徒にとって洗礼が、「古い自分が死に、神とキリストを中心にした新しい生活へ」と生まれ変わる再生を意味しているように、17世紀初期のピューリタンたちにとって、大西洋の水をこえて旧世界から新世界へ渡ってくるのは、まさに宗教的体験としての再生であった。旧約聖書の事件と新約聖書を互に対応する予型と対型の連鎖として見るタイポロジー的想像力が、紅海をこえて約束の地カナンへ向かうモーゼの「出エジプト」を、ヨルダン川での洗者ヨハネによるイエス・キリストの洗礼と重ねあわせるように、日常的な現実の背後に聖書の世界を二重写しに見るピューリタンたちのタイポロジー的想像力は、大西洋をこえて新大陸に到着したみずからの航海の背後に、たんに「出エジプト」のみならず「キリストの洗礼」をも見通していたのである。

そしてアメリカの荒野に立ったピューリタンたちは、みずからを始源の大地に生きる、再生した新しい人間として定義する。エデンという言葉はもともと「囲われた場所」という意味だが、アメリカの初期ピューリタンの社会は、まさに荒野のなかにつくられた「囲われた場所」＝エデンであり、そこに暮らす彼らは、墮落以前のアダムでありイヴであるというのである（それと対照的な

は墮落以後のヨーロッパであり、墮落したヨーロッパ人である)。タイポロジーも最終的に行き着くところまで行き着いたわけであるが、しかしアダム・イメージがいかにその後のアメリカ人の自己定義に大きな影響をあたえたかは、R. W. B. ルイスが『アメリカン・アダム』のなかで、アメリカ文学の古典を広くとりあげながら論じているところである。

もう多くを語る必要はあるまい。若さと新しさを崇拝するアメリカ、つねに荒野との接点を求めてフロンティアに挑戦するアメリカ、世界のアンチキリストたちにたいしてキリスト教徒としての正義を追求しつづけるアメリカ——このような現代アメリカのさまざまな姿のなかに、千年王国論的な終末論とタイポロジーに特徴づけられる初期ピューリタンの原体験がいまだに息づいていることは明らかであろう。ほぼ400年を経てなおアメリカのなかにその原体験が息づいている事実が語っているのは、エリアーデのいう「永遠回帰の神話」が、直線的歴史観のなかに生きる人間の想像力にとっても、あまりに魅力的で強力な神話であるという事実ではないだろうか。

## 註

1. この論文は、横浜国立大学の総合領域「始めと終わり」での講義をもとに研究をすすめ、まとめたものである。
2. ピューリタン植民地の歴史については、大木英夫、大下尚一を参照。
3. アメリカのピューリタンたちの17世紀から18世紀前半にかけての文献に見られるタイポロジー的思考法については、Bercovitch (ed.) を参照。

## 引用文献

Bercovitch, Sacvan (ed.), *Typology and Early American Literature* (U of Massachusetts P, 1972)

Bradford, William, "History of Plimoth Plantation", in Perry Miller and Thomas H. Johnson (eds.), *The Puritans*, vol. 1 (Harper & Row, 1963) pp. 90-117.

Eliade, Mircea, *The Myth of the Eternal Return* (1954; Princeton UP, 1971) [エリアーデ、ミルチャ『永遠回帰の神話』[堀一郎訳] (未来社、1963)]

Lewis, R. W. B., *The American Adam* (Chicago UP, 1955)

Melville, Herman, *Moby-Dick* (1851; W. W. Norton & Company, 1967)

Winthrop, John, "Journal", in Perry Miller and Thomas H. Johnson (eds.), op. cit., pp. 125-143.

Winthrop, John, "A Modell of Christian Charity", in Perry Miller and Thomas H. Johnson (eds.), op. cit., pp. 195-99.

エリアーデ、ミルチャ『宗教の歴史と意味 ミルチャ・エリアーデ著作集第8巻』[前田耕作訳]

(1973; せりか書房、1992) [*The Quest, Meaning and History in Religion* (1969)]

エリアーデ、ミルチャ『神話と現実 ミルチャ・エリアーデ著作集第7巻』[中村恭子訳] (せりか書房、1986)

大木英夫『ピューリタン』(中央公論社、1974)

大下尚一(編)『ピューリタニズム』アメリカ古典文庫15 [大下尚一訳] (研究社、1976)

シュミットハルス、ヴァルター「終末論」『西洋思想大事典2』(平凡社、1990), pp. 503-510.